

## 「敬意と情け」

第15組同朋の会推進員 福手 正

私は、岐阜高山教区第15組同朋の会推進員の福手 正ともうします。現在、岐阜地区同朋の会推進連絡協議会の副会長をやっております。今日は『敬意と情け』について少し話させていただきます。

今年の1月1日、新年の家族団らんの真っ最中、不意に襲った能登半島地震。一瞬のうちに平和な日常が奪われ、被害の拡大と共に、そんな時、我々は、はたして何を思い、何にすがって生きていけるのでしょうか。まだ続く余震に怯えながらも、場合によっては肉親との別れ、住み慣れた家屋、愛着のある地域との別れ・・・

私はつい先日、後期高齢者になりましたが以前、消防署に勤めておりました。今から約30年前の平成7年1月、阪神淡路大震災の3日後に岐阜県の広域消防救助隊の一員として神戸市に入り、火災の消火作業や家屋倒壊による救助活動をおこなってきました。神戸市に入って思ったのは昔、戦争でめちゃくちゃに破壊された街を写した写真そのものでした。街行く人は皆、リュックを背負い、路頭に迷い、道路上に座り込んで握り飯をほうばっている。まさにあの時の光景が今、テレビ等で見る能登の姿なのです。

救助を待つ人にも、避難所で手を取り合って生活する人にも、それぞれかけがえのない家族がいて、両親がいて、ご先祖がいて、そして知人、友人と・・・その人達のお陰で今、自分がまだ命があることに感謝し、心の中で手をあわせ、ひたすら生きることへ全力を傾けてみえるのではないのでしょうか。

又、これからの生活を考えた時、悲観的な思いが大部分を占める中、自分一人では中々生きてゆけない、やはり他の人達の手助け、応援があつてこそ、自分の命が保証されるということ。

いわゆる思いやり、助け合いがいかに大切なものであるか、改めて感じられるのではないのでしょうか。

このように人間生きていく上では人を敬う、尊敬する心と、思いやり、助け合いの気持ち、つまり情の心を災害時に限らず日頃から持ち合わせる事が生命持続の原動力になることを忘れないで頂きたいと思います。